

印象記  
有島武郎

中村武羅夫



印象記  
有島武郎



## 一

確か、大正五年の夏のことだった。私は雑誌の要件で有島生馬氏を訪問した。生馬氏の夫人も令嬢も皆な避暑に出かけて、留守だった。生馬氏と私とは、ピアノを置いた何時も応接室ではなく、家族部屋で、小さなテーブルを中に相對していた。そこへ有島武郎がひよっこり見えたのである。武郎も、家族はみんな避暑に出かけて、至極暢気そうだった。その時は、まだ夫人の健在なころだった。私は、その時初めて武郎にあったのだった。勿

論、生馬氏が紹介してくれた。額の広く秀でた、口元の可愛らしい、気持ちよく響く声だった。

武郎は、その以前から、後に「或る女」として著作集中におさめた長編を「或る女のグリンプス」として「白樺」に連載していた。私は、ちっとも読んだことがなかったが、小栗風葉氏が何かの話しのついでに「或る女のグリンプス」を大へん褒めて、一度読んで見るといいとすすめてくれた。「ひどく情熱的なもので、調子の高い絢爛な文章だから、ああいうのはきつと若い人に受けると思う。」風葉氏は頻りに感嘆していた。風葉氏がその

ことを私に話した時分、里見弴氏なども、やつと一般的には認められかけた時分だったと思う。だから私は、有島武郎がどんな作家だか、そんな知識は、ちつともなかった。が、風葉氏は、令弟が札幌の農科大学にいた関係から、武郎のことなぞも、よく知っていた。農科大学では生徒間に、なかなか人気のあることや、長く外国に行っていたということや、生馬氏や弴氏の長兄であるということなど、私はみんな風葉氏から聞いたのである。

その時、私は、そういう作家の作品なら、是非一度読んでみたいといった。そして「新潮」に寄稿を頼みたい

といった。風葉氏は、是非頼むといい、きつと受けるだろうと喋ってくれた。

だか、それきりになつていた。初めのころ「しきり」「白樺」は愛読したものだが、その時分は「白樺」に対する興味も好奇心も、大分冷めていたし、従つて「白樺」を手取る機会もなく、「或る女のグリンプス」も読みもしないで過ぎていた。が、「新潮」に、武郎の小説の寄稿を頼みたいという気持ちは、私のところにつづいていた。そういう場合に、偶然、武郎と会つたのである。そこで私は、風葉氏が、「或る女のグリンプス」に、



ひどく感心していたことを話し、風葉氏からその話しを聞いた時から、小説の寄稿を頼みたく思っていたのだが、是非ひとつ書いてもらいたいと頼むと、武郎はまるで少女のようにはにかんで、顔を赤くした。そして「白樺」以外には、当分、創作は書かないつもりだといって、ひどく恐縮しながらことわった。私は、しいて頼むことが出来なかった。それで、若し「白樺」以外に創作を發表するような時期が来たら、必ず「新潮」に欲しいと固く約束した。

「一度、ほかの雑誌に書き始めると、うるさくて、仕方

ありませんよ。」

微笑を含みながら聞いて居た生馬氏が、武郎に行つた。

「何が……？」

武郎は生馬氏の言葉の意味がよく呑み込めないらしいか  
つた。

「方々の雑誌から頼みに来て、随分うるさいんです。」

「なに、そんなことが……」

慌てて生馬氏の言葉を打ち消した武郎の顔は真赤にな  
つて、そもそも羞恥に堪えないかのような、ひどく混乱  
した表情をした。その時の印象を、私は忘れることが出

来ない。何の気なしに言ったらしい生馬氏の言葉が、武郎の羞恥心をはげしく衝いたのである。その時武郎の感じた羞恥の感情は、そのまま私の神経に来た。

## 二

その時の有島武郎の羞恥の感情は、私の神経にぴたりと来た。弟の生馬氏や淳氏は、兎に角文壇に有名になつてゐるので、雑誌記者がうるさいほど押しかけるかも知れないが、武郎は、まだ、「白樺」だけにしか作品を發表しない時分で、文壇的にはちつとも有名じゃないし、ま

だ海のものとも山のものとも分らない時である。外の雑誌に作品を発表しても、果して生馬氏や淳氏のように、うるさいほど雑誌記者が押しかけてくるかどうかも分らないのに、それを生馬氏が、一度ほかの雑誌に出し始めると、雑誌記者が押しかけてうるさいなどと、流行作家になることを、頭から決めたような言い方をしたものだから、それが武郎の羞恥心はにかみにふれたのだ。——少くも私には、武郎のその時の羞含みはにかみが、そんな風に思われて、同感だった。

小説を書いてくれという話しはそれきりになっていた

が、その後「新潮」にいろんな人の海外で会った名士の印象を、つづけて載せた時、武郎にもクロポトキンに会った時のことを書いてもらった。写真版にして掲げるために、クロポトキンから武雄に来た絵端書を借りてきた。写真版にして載せることは載せたが、その後、多分私の粗漏からなのだろう、その絵端書をなくしてしまったことに気が附いた。気が附いたのは、その絵端書は大事なのだから、かえしてくれという催促のハガキが、武郎から来てからのことである。催促されるまで打っちゃって置いて、なくなっただでは全く済まないの、いろいろ大

騒ぎしてさがして見たが、どうしてもない。とうとう私は、長い詫びの手紙を書いてあやまると、すぐ、武郎から催促などして気を揉まして悪かった。そんなに気にかけないでくれと、却ってこっちで恐縮するような、丁寧な手紙をくれた。幾ら雑誌記者なんかアバズれだといっても、そういう場合に自分を恥じたり恐縮したり、感激したりする感情は持っている。私は、本当に自分の粗漏を恐縮し、武郎の、他人の感情に対するゆりに、すっかり感激してしまった。

私が生馬氏の宅で武郎に会った翌年の三月末、私は武

郎から次ぎのような手紙を受け取った。「拝呈益々御清福奉賀候昨年お目に懸り候際は当分白樺以外の雑誌には発表致さぬ様申上げ置き候ところ父の死亡後本年より他の雑誌にも発表致し候事に致し候決して貴下に対し食言したる次第にてはこれなく時機の到来したるものにつきあしからず左様御了承下されたく前言に対しこの儀一応申し上げ候義務ある様存じ候間貴意を得たくこの段申し上げ候。」

他雑誌というのは「新小説」のことで、多分田中純氏がやっていた時分だったと思う。私は人が見付けて先口

になつてるものを、そう暗々他の雑誌に取られてたまるものかという気がして、同時に「新潮」にも寄稿してほしいことを交渉した。そして「新小説」には「カインの末裔」を、「新潮」には「ある男の手紙」？ を、同時に発表することになった。

そういうことで、武郎と二三度会つてる中に、私は、当時長編ばやりの文壇だったから「或る女のグリンプス」を完成して、出版して見てはどうか、新潮社に話して見てもいいとすすめると、武郎は「有島武郎著作集」の腹案を話して、自分の著作はバラバラに出版せず、同一形



式にまとめ、同一書店から別冊にして出版したいという話しだった。私は、その出版形式を大へん面白いと思った。そして、早速新潮社の佐藤氏に話して、出版をすすめると、当時、武郎は、まだ「カインの末裔」の発表以前で、一般的には評判のちつともない時だったから、佐藤氏もちよつと考えていたが、とうとう出版することにきまったのである。そして「新小説」と「新潮」とに作品を発表すると、あの評判であり、著作集はあの売れ行きだった。

亡くなった文学者のことでも、まだ、大町桂月、上田

敏、山路愛山、その他書きたいこともあるが、余り長くなるからこれで打ち切る。





日本文学電子図書館

---

文壇隨筆

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮社

大正14年11月10日 印刷

大正14年11月15日 発行

---

日本文学電子図書館